九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

テレビ討論番組におけるフィードバックの機能と司会者の役割

網野, 薫菊
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494677

出版情報：比較社会文化研究. 24, pp.1-11, 2008-09-30. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第24号（2008）1～11
Social and Cultural Studies
No. 24 (2008), pp. 1～11

テレビ討論番組におけるフィードバックの機能と司会者の役割

網野薫菊（アミノ カオル）

要　旨

テレビ討論番組は司会者、参加者、そして視聴者という3者が存在し、限られた時間内である特定の目的を達成しなければいけないという「特殊な場面」における言語行動である。本研究は司会者がその役割を達成するために、発話交換構造の基本であるIRF（Coulthard & Brazil, 1992, 66）をどのように使用して、場をコントロールしていくのかについて、主にF（フィードバック）とI（開始）の流れで分析した。その結果、司会者がターン分配を行う前にフィードバック（FB）が70%以上の確率で観察されること、また長いFB（パラフレージング）で要約、評価、言い換えを行った後に、A：指名、B：論点の展開、C：別の話題の導入、D：対立意見の導入、E：同じ話題について別の人の意見を聞くという五種類の言語行為が行われることが分かった。またFBの種類も各場面をコントロールするために使い分けられており、「あいづち」や一語の繰り返しなど限られた反応（ミニマル・リスポンス）は、司会者がターン分配など次のI（開始）に失敗した場合に参加者に対してターン要求シグナルを再度強く示す場合に使用されていることが明らかになった。

キーワード：IRF交換構造　話題の転換　パラフレージング　限られた反応　アジェンダ

1．はじめに

本研究ではテレビ討論番組において、ターンテイキングやターン分配で主導権を持つ司会者が、どのように次の話者にターンを分配し、新しい争点を導入しているのかを、それらの新しい流れの直前になされるフィードバックとの関連性で捉えようとする。

テレビ討論番組は身近な知人との普通会話などと比べ特殊な場面設定による会話（institutional talk）であり、そのような特殊な場面における会話については日本の結婚式におけるスピーチ進行を取り上げたものがある。C. Dickel（2005）は、日本の結婚式において新郎新婦の上司や年配の参加者と同僚や同級生などの同年代の参加者によるスピーチの違いを取り上げ、それぞれの参加者による場に規定された言語的役割（situationally - defined speaking roles）に関して、各場面における各参加者の話し方がどのように社会的役割やアイデンティティと関係しているのかを観察した。その結果、同僚によるスピーチは冗談や婉曲表現などを含み、速いペースで行われるのに対し、年配の参加者によるスピーチは緻密に作り上げられ、長く続き、また多くの敬意表現を含むといった特徴をもつことが明らかになったという。また、そういったスピーチの形式の相違は各参加者のアイデンティティや期待される役割を反映しているという。

本研究は場面と発話と発話者の場面における役割の関係性に焦点を当てて、司会者がイニシエーション時にどのようにフィードバックが使用しているのかに関して、テレビ番組における司会者の言語的役割やアイデンティティと言語表現との関連を分析する。

2．先行研究

2．1　TV討論番組と司会者の役割

本田（2004）は討論番組における司会者の役割について分析を行い、司会者は参加者A→司会者→参加者B→司会者→参加者Cというように、参加者同士の自由なターンの取り合いがなく、司会者が指名によるターン分配、そしてそれに続く質問をすることで番組を進行させていることを述べている。また司会者に特徴的な言語行為として、「あいづち」と「見解伝達（パラフレージング）」を挙げ、司会者はあいづちを次のターン分配が近づいていることを現発話者に知らせるシグナルとして、また参加者による発話を保護、促進するために使用していると言う。

さらに前発話者の見解伝達を要約し解説を加えるといっ

た「パラフレージング」について参加者や視聴者への理解促進として質問の前に出現すると述べている。

またパラフレージングとターン分配が同時に行われている例を紹介し、「面白い例」として紹介している。

例文１）

01　司会者：僕は頭が悪いんでよく分からなかった。

02　なに、その工藤さんのはなしだと、なに人がみ民

03　間人が行っても９条に違反するってのは？

本研究では下線部のパラフレージングはフィードバックの一部でありコメントのアクトに含まれ、２行目の「なに、その工藤さんのはなしだと」以降の発話は新しい開始の質問のアクトに含まれると考える。そしてこのフィードバックとターン分配という一組の流れはTV討論番組においては司会者がよく行う発話形態であるとする立場を取る。

２．２　IRF交換構造と話題の終結

一方、Sinclair & coulthard (1975) は教室における言語構造を分析した中で、IRFという発話交換における大きな構造を提唱している。教室内には「先生」というターンテイキングやターン分配において主導権を持つ存在がおり、その点、テレビ討論番組における「司会者」の存在と類似した部分があると考えられるため、本研究ではこのIRFの概念を取り入れた分析を行う。

例文２）

I→01　Doctor: And what's been the matter recently ?

R→02　Patient: Well I've had pains around the heart.

I'→03　Doctor: Pains − in your chest then ?

R'→04　Patient: Yes.

I2→05　Doctor: Whereabouts in your chest ?

R2→06　Patient: On the − heart side, here.

F2→07　Docto: Yes

I3→08　Doctor: And how long have you had these for?

R3→09　Patient: Well I had' em a-week last Wednesday.

I3'→10　Doctor: A week last Wednesday ? (Coulthard and Braizil 1992, 66)

例文２において05は医者による開始、06は患者によるリスポンス、07は医者によるフィードバックに該当し、このように開始（I）、反応（R）、フィードバック（F）という流れで相互交渉が行われていることが伺える。また Coulthard et.al (1992) ではIRFそれぞれの下位構造として22の「アクト」という機能面の分類を提示している。開始には「情報提供」や「質問」、反応には「返答」、そしてフィードバックには反応を正答とする「受け入れ」、反応の質に対して言及する「評価」、さらに「コメント」というアクトが含まれるという。

図１：IRF構造とアクト

例文２	発話交換	アクト
05 Doctor: Whereabouts in your chest ?	開始	質問(指名)
06 Patient: On the − heart side, here.	反応	応答
07 Doctor: Yes.	フィードバック	受け入れ

２．３　フィードバックと話題転換および ターンテイキングシステムとの関連性

本研究ではCoulthard (1992) の提唱するI（開始）は３つの交換構造の流れがまた新しく始まる部分であるために「話題の転換」や「話題の結束性」と関わるのではないかと推論する。そのために、次に「話題」と「話題の転換」に関する定義を概観したい。

南（1981）は連続した会話の中で単位部分を認定する基準としてポーズの有無、内容の連続性、同一発話者、コミュニケーション上の機能、発話スタイルの一致、話題の性格の一致などを挙げ、話題の結束性を認定する基準としては百科辞書的類縁性、常識などに言及している。本研究では話題を「会話の中で導入され展開された、内容的に結束性を有する事柄の集合体であり、会話参加者の相互協力によって枠組みが設定され展開されるもの」とする三牧(1999 a）の定義に従いたい。

また「新しい話題」とＩＲＦ交換構造のうちのフィードバックに関しては、猪崎（1998）によると新しいトピックに移行する前には発話者の発言を「確認」するといった現トピックを終了させる言明が現れるという。この現象は図１中の07において確認できる「フィードバック」と同じ性質を持つものではないかと考えられる。また例文２に適用すると、08にてI3という新しい開始に移行する前に07において医者による患者に対するフィードバックが観察されるが、07の発言は、患者のリスポンスを確認し、胸部の痛みについての話題を終了させているとも考えられる。これにより話題の終了とフィードバックにはある種の関係性があることが伺われる。この現象は本田（2004）で述べられる「あいづちが次のターンが近づいていることを知らせるシグナルの役目を果たす」という記述とも関連しており、猪

崎の言う「話題を終結させる確認」も同様のシグナルとしての役割を果たしていると考えられる。

また従来「話題の転換」もイニシエーションと同様の概念を持っており、イニシエーションのうちどこまでが話題を転換させていると認められるかという内容面の結束性に関しては南（1981）の述べる百科辞書的類縁性、常識の問題が参照できるだろう。また木暮（2002）の記述した世界共通で普遍的な結束性に関する知識と文化的な側面によるものと共通していると考えられる。つまり先行研究からは、話題の転換について客観的に判断することは非常に困難であり、あるターンが話題を転換しているのかどうか、また発話のうちどこまでを転換と認めるかは大変な困難を極めると考えられる。その曖昧性を打開するために、木暮(2002)は話題転換の型を新出、派生、再生と三種類に分けるという試みを行っているが、あらゆるＩ（開始）をその３種類の話題の型に分類するのは困難であった。そのため本研究では従来の「話題の転換」の代わりに、IRF ３つの交換構造における「開始」という概念を分析の中心に据えることとする。

またそれらの「話題」をターンという概念から観察すると、同一人物（例文中では医者）によるフィードバックから開始へのつながりはターンテイキングシステムの中では「再自己選択ターン」と呼ばれるものであり、金（2000）によると話題転換や沈黙が、再自己選択の前に現れるという。例文２においても07, 08は両方とも医者によるターンであり、07で患者の答えを確認、受け入れするフィードバックの後に、話題転換が起こっており、08で再び、医者が患者の発言をはさまずにターンを取っている。

本研究では発話交換構造のうち確認、受け入れ、コメントなどフィードバックとして認定され、かつ先行話題を終結させる機能を持ち、次に開始を始める話者と同一人物によりなされるターンを観察の対象とすることになる。

３．本研究の枠組み

３．１　先行研究への疑問

この研究では司会者によるターン分配をIRFの中の開始にあたると考える。その開始の中に指名や質問といったアクトが含まれるとする。そして司会者によるパラフレージングとあいづちを別々の行為として論じるのでなく、フィードバックとして同列に位置づけ、そのフィードバックがどのような様相を呈するかを中心課題とする。

そしてフィードバックのあり方を司会者の「討論番組」内で課せられている役割との関係で分析する。

先行研究との関わりで述べると、本田（2004）はターン分配、質問、あいづちによる発話促進、パラフレージングという流れを一連の流れとしているが、パラフレージングをその次のターン分配の種類(I)との流れでは論じておらず、パラフレージングとターン分配が一緒に出る例を前発話者とターン分配先が同一である点を示して「面白い」と述べているためにパラフレージングと次のターン分配の結びつきが特殊と考えられている。本研究ではパラフレージングをフィードバックの一種、ターン分配が開始の一種であり、フィードバックと開始との結びつきが特殊でないと考え、パラフレージングとフィードバック、そして次のターン分配の流れや機能を分析の対象とする。また本研究ではあいづちもフィードバックの一種であり開始の前にパラフレージングと同様のレベルで現れると考え、分析の対象とする。そのためパラフレーズとあいづちをフィードバックとして捉え、次に来るターン分配と質問を新しい開始（Ｉ）として２つの階層に分けて観察する。その際、パラフレージングとあいづちという形を取るフィードバックは前発話者目当ての発言であるのに対し、次に現れる開始を構成する指名や質問は次の発話者目当ての発言であるという点も明瞭にしながら観察していきたい。

３．２　本研究の枠組み

本研究が対象とした資料は表２で示したとおりである。サンデープロジェクト（テレビ朝日）と日曜討論（NHK）という２種類のTV討論番組を２回に渡って録画した。

表２：データの詳細

データ番号	番　組　名	録音時間
①	サンデープロジェクト	0:26:45
②	サンデープロジェクト	0:30:46
③	日曜討論	0:30:08
④	日曜討論	0:09:02
	合　　計	1:37:41

それらの音声録音データをスクリプト化し、分析の対象とした。

本研究では次の参加者へのターン分配を開始として抽出し、その直前に司会者による前発話者へのフィードバックが行われるかどうかを観察する。そしターン分配の前にフィードバックが観察される部分も抽出し、各機能や発話交換上の意味を検討する。

まずフィードバックに続く開始についてターン分配、質問といった機能面からでなく、どのような展開の型が見られるのかについて「アクト」という視点も取り入れながら分析する。またフィードバックと開始が続けて発話される部分の頻度、そして各開始の形式の頻度を一般化の可能性

を検討するために提示する。次にその開始の前に行われるフィードバックを実現する各アクトの種類や機能に焦点をあて、質的に分類したのち、その出現度を通して開始前にフィードバックが現れることがどの程度一般化できるのか数値的に検討する。具体的にはまずパラフレージングについて、パラフレージングを実現する言語機能や形式にはどのようなものが観察されるかを見ていく。次にあいづちによるフィードバックを短いフィードバックの一種として捉え、開始やパラフレージングによる長いフィードバックとの関連性を捉え、どのような状況で使用されるのかを分析する。

4．分析結果

4．1　フィードバックと開始の流れ

表3：ターン分配のフィードバックとの共起頻度

ターン分配	フィードバックとの共起		
70	伴う	52	74.3%
	伴わない	16	22.9%

表3は司会者によるターン分配の直前に現れるフィードバックの頻度であるが、この結果よりターン分配数のうち70%以上に前発話者へのフィードバックを伴うことが分かる。この段階ではパラフレージングとミニマル・リスポンスは分類していない状態であるが、フィードバックとターン分配は一対の流れとして司会者によって使用されていることが分かる。

次に示す表4はIRF交換構造のうち、フィードバックの次のIにあたる「開始」がどのような展開を持つかについて取り上げたものである。フィードバックの次にはA:指名、B:同じ話題について発展させる、C:新規の話題を導入する、D:反対意見を導入する、E:同じ話題について他の参加者の意見を尋ねる、という4種類の展開が観察された。

表4：フィードバックの後の開始の種類

フィードバックの後の開始	合計52回	%
A．指名	46*	88.5%
B．新しい話題や視点の導入	13	25%
C．反対意見の導入	10	19.2%
D．他の参加者の意見を尋ねる	24	46.2%

＊開始の種類に関する統計は延べ数

つまりフィードバックの後の「開始」のうち、ターン分配の役割を果たすA:「指名」が9割近くの頻度で観察された。またB:新しい話題や視点の導入、C:反対意見の導入、D:他の参加者の意見を尋ねるという展開はすべて、会話を発展させるために話題の流れを変化させるという行為としては共通している。

4．2　フィードバックの次に指名が来るもの

フィードバックのあとに「指名」によるターン分配が来るパターンは次の開始としては頻出するものである。

例文3）

01　A：（中略）我々はただやっぱりね、たたき
02　　台があったほうがいいだろうと、まずは
03　　わが党はたたき台を出したんで、どうか
04　　皆さんこれで今おっしゃったような国民
05　　的議論を巻き起こしましょう、それもね
F→06　S：それがこれからの議論ですね
07　A：はい
I→08　S：それでね、ちょっと駆け足になるんです
09　　けどこれからの議論をですね、ちょっと
10　　お伺いしておきたいんですが、これが桝
11　　添さんからになりますけれども、通常国
12　　会に憲法改正に必要な国民投票も手続き
13　　されないといけない（中略）

（データ4から抜粋）

この例文において、06が司会者の参加者Aの答えに対するフィードバックとなりアクトの種類としては確認となる。次に07の「はい」という応答詞を挟んで、08で司会者が新しい開始を始めており、「これからの議論」という次の話題を導入した後で「桝添さん」という指名でターン分配を行っている。このような指名は質問などのアクトと共に開始のうちターン分配として観察された。このような指名は質問や情報提供など開始の他のアクトと共に使用されていた。

4．3　フィードバックのあとに論点が発展するもの

4．2のようにフィードバックのあと多くは指名と共にターン分配がなされるが、ターン分配後の展開には新しい話題、別の見解、対立構造の導入、同じ話題について他の参加者の見解を聞くという4つの型が観察された。次からそれぞれの開始の型を例文とともに説明する。

4．3．1　次の話題を導入

例文4）

01 A：（中略）それをやりもしないでね、こっ
02 ちは棚にあげといてこっちだけ美味しい
03 思いをしたい、使い勝手のいい、えー使
04 いやすい仕組みを作れって言われても、
05 私はうんちゅうわけにはなかなかいかん
06 なっていう。
F→07 S：あー、その辺まだやれるんですけどねー、
08 もう少しね働き方を考える上で賃金のあ
09 り方もセットで考えなければいけないと
I→10 思うんですが、そこでー賃上げはどうな
11 るのかという問題をちょっと話し進めた
12 いんですが、（中略）どうですか、高木さ
13 ん。

（データ3）

この例文中、07でコメント型のフィードバックが行われているが、その次に10で現れる開始では、賃上げについてという新しい話題が展開されている。このように開始で新しい話題が導入される現象はたびたび観察された。

4.3.2 対立意見

またフィードバックで前発話者の論点をまとめて提出した上で、次の開始でその論点と対立する観点を持ち出し、別の参加者にターン分配することもある。

例文5）

01 A：あまりにも今の法律はですね、正社員の
02 ほうを守りすぎてしまう。あまり仕事を
03 しないでも昇給してしまう。そういう仕
04 組みを残したままでは難しいわけなんで
05 正社員の働き方、特にホワイトカラーの
06 働き方とーそのバランスの中でこういう
07 問題も考えていくべきだと思います
08 ねー。
F→09 S：方法としては賛成だと
10 A：はい
I→11 S：高木さん、あのー組合のほうも当然賛成
12 なんだろうと思いますけど、あのーそも
13 そもね、パート労働者のような非正規社
14 員が増えてきたのは、今の話にもありま
15 したけれど正社員の雇用を守るために組
16 合のほうがむしろですねー非正規雇用を
17 認めてきた、その結果じゃないかという
18 意見があります。その辺はどうお考えに
19 なっていますか。

（データ3）

例文5の09で司会者は参加者Aに対してフィードバックを行っており、ここでのアクトは確認である。Aの「はい」という応答詞をはさんで、次の11で指名による開始を開始を行っている。ここの論点の流れでは参加者Aは格差是正の問題について、正社員を優遇しすぎるのはおかしい、パート社員などの最低賃金の保証に賛成であるという立場を表明している。それに対し、司会者は一度、「最低賃金の保証」に賛成していることを確認してから、次の話者が「正規社員を優遇しすぎる」立場にあることに示し、二の意見における対立構造を引き出そうとしている。

このようにフィードバックと次の開始を対で用いることによって、対立軸を提示する方法はたびたび観察された。

4.3.3 同じ話題について、別の人の見解を聞く

例文6）

01 A：（中略）どうするのか考えてますよ。
02 （S：うん）憲法改正もやってー例え
03 ば明治維新と逆ベクトルで国を変えよ
04 うという大きなデッサンはもってま
05 す。聞かれなかったからいわなかった
06 だけでねーそりゃこの国を徹底的に変
07 えようというねー//
08 S：//しゃー堺屋さんのいう黄金の10年と
09 いうのはリアリティありかー
10 A：かなり厳しい。ただ僕らの世代はー質
11 素倹約頑張ってーそして自分たちが文
12 化を楽しむことをやっていけば大丈夫
13 だと
F,I→14 T：大丈夫。菅さん。
15 B：ここでいろいろ世代交代ですからー私
16 もエンジニアに戻りたいなーと最近
17 思ってるー

（データ1）

例文6は司会者が団塊の世代に今後の抱負を聞いている場面であるが、01〜07でAの抱負が述べられた後に、14で司会者は「大丈夫」と繰り返しによる受け入れのフィードバックを行い、同時に次の話者の名前を呼ぶというターン分配により開始を行っている。Bが15においてすぐ話し出したのは、司会者が「今後の抱負」という話題について他参加者の見解を聞こうとする流れであることを理解しているからであろう。

5．パラフレージングとフィードバック

フィードバックには受け入れ、コメント、確認という三つのアクトがあることを述べたが、この節ではパラフレージング（言い換え、要約、補足）が4節で述べた「次の開始のタイプ」との関連でどのように使用されているのか、またそれらのパラフレージングを実現する言語形式にどのようなものがあるのかについて検討する。

5．1　論点の明確化

フィードバックの一種として司会者に使用されていたパラフレージングは、参加者が実際に発言した内容を再度もっと争点に即した形で提示し、他の参加者やTV前の視聴者の理解を促進に役立たせている様子が観察された。

例文7）

01　A：ほんと大変だからこの住民の安住を守
02　　る、いわゆるそのー退去していただく保
03　　障、これ一つ大きな問題、（中略）もう一
04　　つは構造的な問題なのかそれともこれだ
05　　け個別の問題なのかということを含めて
06　　原因究明をしなければいけない、今この
07　　番組では後者のほうをやってるわけです
08　　よねー、で政治の側はまず前半の部分
09　　はー与党もすぐに公明党だけじゃなくて
10　　自民党と一緒になってー対策本部作って
11　　集まってやりますけど//
F→12　S：//最終的にやっぱり被害者をどうするか
13　A：そうですね。
I→14　S：その前にちょっと余計なことだけど、
15　　何？ファックスを出せ？出す、あとから。
16　　実はこのねー問題はーことうこうすけさ
17　　んというねー国土省長官がね、えーこの
18　　人と会ってますよね
19　B：ええ、会いました。その会ったことを聞
20　　きたいんですがー

（データ2）

上の例文では、1～11で参加者Aが被害住民の安住を守るための行動について述べているが、12でAの発話を全部要約した形で「やっぱり被害者をどうするか」と一言で要約し、その後に14から献金問題という新しい話題を導入している。ここで司会者は、前の話題内容を明確化した上で新しい話題を導入していると考えられる。このように参加者の発話内容を適宜一言でまとめるパラフレージングを行うことにより、視聴者や他の参加者にとって論点を分かりやすく提示し、討論構成自体への理解を深めさせていると考えられる。

5．2　対立構造の明確化（活性化、分かりやすさ）次のIとの関連

例文8）

I 1→01　T：えー児島さんはー106%（A：はい）全
02　　部負います。（A：はい）とやってるん
03　　です。じゃー視聴者からいくつも
04　　ファックスが来てー本当にねー106%
05　　で買い戻してくれるのかと
R 1→06　A：はい、もちろんです。
F 1→07　T：そこは責任もつ？
08　A：責任持ってやります。
I 2→09　T：でーそこの責任持たないところが出て
10　　きたらー国はどうする？
11　B：これねー結局その前にそれだけの責任
12　　がある仕事をしているわけですから
13　　100%持たなければならない。（中略）
14　　で、106%うんぬんという話があって、
15　　私も新聞で拝見しましたが実際的には
16　　難しいスキルが入ってるんだろうなと
17　　いうふうに

（データ2）

例文中、07で参加者Aの発話について確認したあとで、09～10において参加者Bに対し同例文中2番目の「開始」として、万が一責任が遂行されなかった場合についての質問を投げかけている。

このようにTV討論番組では、参加者間における主張の対立が随時観察される。その場合に参加者1の発話をパラフレージングによる言い換えや補足または要約した後で、対立する立場の参加者2にターン分配が行われる。この場合司会者はフィードバックと開始を対として用いて対立構造を前面に押し出すことで、TV討論番組に緊張感や臨場性を増し、エンターテイメント性を高めていると考えられる。

6．アジェンダに沿った進行をスムーズに行う

例文9）

01　A：9条にしても今の件にしても、それは非
02　　常にフレキシブル、我々は、ただやっぱ

03　りね、叩き台があったほうがいいだろう
04　と、まずはわが党は叩き台出したんで、
05　どうか皆さんこれで今おっしゃったよう
06　な国民的議論を巻き起こしましょう、そ
07　れもね//
F→08　S：//それがこれからの議論ですね
09　A：はい
I→10　S：それでね、ちょっと駆け足になるんです
11　けどこれからの議論をですね、ちょっと
12　お伺いしておきたいんですが、これが桝
13　添さんからになりますけど、通常国会に
14　憲法改正に必要な国民投票も手続きをさ
15　れないといけない、国民投票法案、一応
16　与党側も合意しているとありますけれど
17　も、これは最終的に民主党を含めた3党
18　で合意して出そうと（中略）

（データ4）

アジェンダは相互行為の実質的内容や方向付けについての事前の取り決め（森本，2000）であり、TV討論番組においてはあらかじめ決定された計画や筋書きに従って場面を進行させるための筋書きを指すと考えられるが、TV討論番組においても制限された時間内に取り上げるべき話題や争点がいくつもあり、司会者はそれの進行をつつがなく終える役割が課せられていると考えられる。例文中ではフィードバックである08の発話が07のAを遅れもなく引きついた形で発話されている。このフィードバックはコメント、もしくは確認のアクトを持つと考えられ、開始は情報提供と質問を兼ね合わせた形となっている。例文中01〜07では党が出した法案の詳細を国民が検討すればよいという意見が述べられているが、司会者はそれらを「これからの議論」としてまとめ、直後の開始において「これからの議論」としての次の国民投票法案への番組の流れを導いている。このようにパラフレージングを利用して、前発話者の内容をこれから持っていきたい話題の導入と関連付けることにより、司会者は時間内で終えるべき議論を次々と導入している。

7．シグナルとしてのパラフレージングとターン分配の失敗

例文10）

01　A：（中略）時間が長いからいいというより、
02　どんな仕事をしたか、成果を測るような
03　仕事なんですねー。従ってー今まで時間
04　の長さで給料が支払われていた、残業代
05　が支払われていたというような給料を残
06　業代も含めて年俸の形で支払おうとこう
07　いう制度なわけですね。
F→08　S：ということはー一定の成果を上げれば働
09　く時間を短くすることも、可能（A：そ
10　うですね）かもしれない。
11　A：どちらかというと長く働くほうが評価さ
12　れるような社会から、短くて効率よく働
13　いていい成果を出そうと、専門職につい
14　てはこうした働き方を変えていくべきだ
15　と思うんですねー。
I→16　S：高見さんねー、これ自由な働き方をでき
17　るようにするという法案であればー組合
18　としても賛成できない法案ではないと思
19　うんですけれども、これどうして反対さ
20　れてるんですか。

（データ3）

この例文ではフィードバックと開始のつながりが判然としないが、司会者のアジェンダでは08〜10のフィードバックを行ったのちに、16〜20で観察されるターン分配に移行するつもりではなかったのではないかと思われる。しかし参加者Aは08〜10のようなパラフレージングが本田（2004）の言うターン要求のシグナルの役割も兼ねており、このパラフレージングが出現することで通常参加者は次のターン分配が近づいていることを察する。しかしこの例文中では、参加者Aは08〜10における司会者によるフィードバックをターン譲渡が近付いているとは解釈したかどうか分からず、次の11でフィードバックに対する返答を始めている。とも取れる発話を行っている。司会者は、11〜15における参加者Aの発言を無視するような形で16においてやっとターン取得し、参加者Bへのターン分配に成功している。ここでは当初の司会者のアジェンダでは08〜10におけるフィードバックの後に16以降の開始を続ける計画であったが、それが上手くいかなかった例だと考えられる。

参加者がそれぞれの意見を代表する立場で出席するTV討論番組においては、このように、参加者が司会者のターン要求やターン分配のシグナルを無視して、自らの主張を続けるということは多く観察される。それぞれの立場を担う各参加者にとっては司会者によるターン要求シグナルを無視してでも、自らの主張を述べ続ける必要があるのかもしれない。次の節ではこのようなフィードバックの後のターン取得に失敗し、「開始」が続けられない場合の司会者の言語行為を分析する。

8．あいづちや繰り返しによるフィードバック

すでに述べたように例文10では、参加者Aの発話のパラフレージングによるターン要求は失敗し、その次の参加者Aの発話のあとは無視し、16でいきなり次の参加者を指名することで再度開始を目指している。このように無視によるターン取得の他にあいづちや繰り返しといった短いフィードバックでターン要求を再度することにより、開始の成功を目指すこともある。

例文11)

01 A：（中略）どうするのか考えてますよ。
02 （S：うん）憲法改正もやってー例え
03 ば明治維新と逆のベクトルで国を変
04 えようという大きなデッサンはもっ
05 てます。聞かれなかったからいわな
06 かっただけでねーそりゃこの国を徹
07 底的に変えようというねー//
F 1→08 S：//しゃー堺屋さんのいう黄金の10年
09 というのはリアリティありかー
10 A：かなり厳しい。ただ僕らの世代は一質
11 素倹約頑張ってーそして自分たちが
12 文化を楽しむことをやっていけば大
13 丈夫だと
F2,I→14 T：大丈夫。菅さん。
15 B：ここでいろいろ世代交代ですからー
16 私もエンジニアに戻りたいなーと最
17 近思ってるー

（データ1）

上記の例文中08で、司会者は参加者Aの発話を半ばさえぎるようにしてパラフレージングによるフィードバックを行っている。しかしそのフィードバックが行われることにより、次の参加者へのターン分配のためのターン要求を司会者がしていることを、参加者Aは気づかず、もしくは無視し、10〜12でさらなる意見を述べている。これはターン要求の失敗とも言えるが、14で司会者はやっと指名を成功させている。その開始の直前に「大丈夫」という1つの語を繰り返すパラフレージングが行われている。このようにそっけなく短いタイプのフィードバックは一度長いフィードバックが行われたあと、ターン要求のシグナルが参加者から理解されずに、ターン取得が失敗したあとに行われる傾向がある。句の繰り返しだけではなく応答詞やあいづちによるフィードバックも同様の場面でたびたび使用されている。

例文12)

01 A：えー言われることはよく分かるんで
02 すけどもね、僕は代表討論に当時から
03 言っていたのはー反文明運動だと
F 1→04 （S：反文明ね）ですから、まー科学
F 2→05 技術の問題は今でも、（S：原発反対
F 3→06 運動があり）原爆ですねー（S：原発
07 もあるんだけどねー、まーまーいい
08 や）まーそれは一種のかつての＃＃運
09 動じゃないけど、近代文明に対する批
F 4→10 判が今まであったと（S：うん）そこ
11 が原点だろうね。
F5,I→12 S：なるほど。えー山本さん。菅さんが
13 ねー何度も引っ張ろうとしたけど来
14 なかったと。

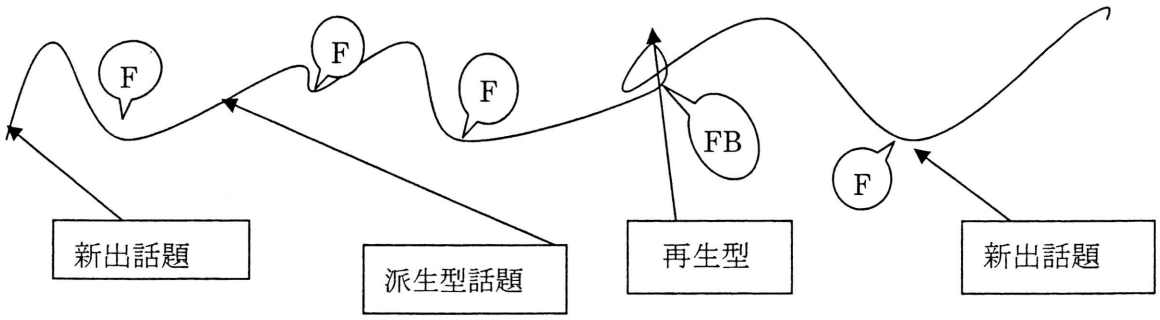
上記の例文では司会者によるパラフレージングによるフィードバックが04から18にかけて行われている。しかしそれらは参加者Aの語りの中に「合いの手」として含められる形となり、参加者AはSにターン譲渡することはない。司会者がターン取得に成功するのは10の「うん」、12の「なるほど」という応答詞やあいづちによる短い受け入れが行われた後である。一度長いパラフレージングによるターン要求が失敗したあと、応答詞、あいづちなどの短いフィードバックが開始の前に出現する理由としては、もう一度長いフィードバックを与えるとさらに参加者が話し続ける可能性があるために、ターンの区切りや終わりのシグナルを短いフィードバックによりはっきりと示すことにより、参加者をシグナルに気づかせる可能性を高めるためと考えられる。

9．考察

本稿ではフィードバックと次の開始の関連性について分析してきたが、2.3で述べた話題の変化という視点から概観すれば、フィードバックと話題転換との関連性をほのめかすものでもある。しかし本研究で観察されたフィードバックは、「話題の転換」を導くというより、もっと複雑かつ微妙な次の開始への流れを調整する役割を果たしていた。このような複雑な会話の流れや変化について「話題転換」と一言でまとめるのを避けるために、話題転換の型を「新出」「派生」「再出」という三種類に分けることによって解決しようとしたものもある。（村上、熊取谷；1993）。本研究では会話における変化や話題の転換はこの三種類の型にも収まらず、適用することは不可能であり、話題の転換を説明するには波モデルが適当であると考える。そして本研究中

にて観察の対象となったフィードバックが頻出するのはこういった会話における変化の波が起こる部分と合致していると考える。

図1）フィードバックと会話における波



この図が示すように、フィードバックは会話において何らかの変化が起こる場合によく使用される発話行為である。このようなFBが頻出する理由としては、「あなたの話を聞いている」というメッセージを発することにより、話題を変化させるという「唐突さ」を和らげるためのポライトネス・ストラテジーとしても考えられるだろう。しかしTV討論番組という場面においてはそれ以上の実際的機能が盛り込まれている。参加者の発言内容をまとめたり全体の論議の中で位置づけたりすることにより視聴者の理解を促進するために用いられたり、限られた時間内で次々と争点を導入し「アジェンダ」を遂行するためのストラテジーとしても役立っている。つまりテレビ討論番組におけるフィードバックは司会者が場をコントロールし、自らに課せられた役割を達成するための道具として活用されており、また視聴者、さらには観察者にとっては特殊な場面における会話を解釈する際の鍵となる言語行為でもあるのだろう。

10．結論

本研究はTV討論番組中で司会者によって行われる「フィードバック」使用の実態を明らかにするために、スクリプト化したデータ中に観察されるＩＲＦ交換構造のうちフィードバック（F）と次の開始（I）の流れに焦点を当てて観察した。さらにフィードバックのうち「パラフレージング」と「ミニマル・リスポンス」という二つの型が一定の会話や番組の流れとどのような関係性を持っているのかを量的、質的に分析した。

その結果、フィードバックと次の開始は高頻度で一対となって機能しており、次の開始では新しい話題や視点を導入する、対立意見を導入する、あるいは同じテーマについて他の参加者の意見を聞くなどの流れがターン分配とともに観察された。フィードバックの種類別の機能として、「パラフレージング」は評価・受け入れ・コメント・確認として使用されるのに対し、ミニマル・リスポンスにはあいづち・短い語の繰り返し・応答詞などの種類が観察された。

さらにこういったFBはそれぞれの機能の違いに基づき、司会者に必要な場のコントロールを達成するために使用されていた。例えばパラフレージングは対立する立場を明確にしたり、議論を活性化したり、鍵となる考えを明確に提示したり、あるいはあらかじめ計画された番組の進行を目指すために活用されていた。一方、あいづちや繰り返し、応答詞といったミニマル・リスポンスは現発話者のターンを終了させるために使われており、特に現発話者が司会者によるターン要求のシグナルを無視、あるいは見落として話し続けた場合によく出現した。フィードバックは参加者の発話をどのように受け取り、番組の流れの中で位置づけたいのかという司会者の意図と関わり、参加者の発話を促進し、番組の流れをコントロールするために使用され、つまりは番組のアジェンダに沿った進行を目指すという彼らに課せられた役割を代弁するものである。

フィードバックはさらに別の相互交渉の場において、また異なった機能を果たしている可能性がある。しかしそれらの機能は、それぞれの場面における各参加者の言語的な役割と関連していることは共通しているだろう。

［注：データ中の記号について］

★　次の話者による遮り開始点
→←　前発話者へのさえぎり部分
//　遮りや遅れのないターン引き継ぎ

［参考文献］

Deckel, D. Cynthia, (2005). Genre conventions, speaker

identities, and creativity: An analysis of Japanese wedding Speeches. *Pragmatics*, 15(2/3) 205-228

Garfinkel, Harold & Harvey Sacks (1970). On Formal Properties of Practical Actions. *Theoretical Sociology: Perspectives and Development*, New York, Appleton-Century-Crofts, 337-366

Hall, Edward, T. (1977). *Beyond Culture*. Anchor Press, Doubleday, Garden City, New York, 91-136

本田厚子 (2004). テレビ討論における司会者の役割 メディアと言葉 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰(編) ひつじ書房 pp.67-90.

Garfinkel, Harold & Harvey Sacks (1970). On Formal Properties of Practical Actions. Theoretical Sociology: Perspectives and Development, New York, Appleton- Century- Crofts, 337-366

メイナード,K,泉子(1993). 会話分析 くろしお出版 pp. 139-143.

McLaughlin, M. L., & Cody, M. J. (1982). Awkward silences: Behavioral antecedents and consequences of the conversational lapse. *Human Communication Research*, 8, 299- 316.

森本郁代 (2001). 地域日本語教育の批判的再検討－ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して「正しさ」への問い：批判的社会言語学の試み 三元社 pp.215-247.

Rachel, Reichman. (1978). Conversational Coherency. *Cognitive Science, A Multidisciplinary Journal* 2(4), 283-327.

村上恵・熊取谷哲夫 (1995) 談話の結束性と展開構造 表現研究62 pp101-11.

Sinclair, J. McH. & Coulthard R. M. (1975). *Towards an analysis of discourse*. Oxford, Oxford University Press.

The Function of Feedback and Emcee Role in Japanese TV Discussion Programs

Kaoru AMINO

Abstract

A TV discussion program is an institutional talk, which includes emcees, participants, and viewers. Emcees, in particular, are responsible for the completion of each program within a limited time.

This research analyzes how emcees in two political discussion programs control the floor, on the basis of IRF (Initiation, Response, Feedback) exchange structure (Coulthard & Brazil, 1992,66), especially focusing on the flow of F (feedback) and I (initiation). Quantitative and qualitative approaches show that more than 70% of turn-providing act by emcees, occurred simultaneously with Feedback-move, and after long type of Feedback (formulation) are used to summarize, paraphrase, and evaluate, the emcees did one of the following A: call participant's name, B: introduce new topic, C: introduce opposite opinion, and D: Inquire other participants about the same topic. Moreover, it clarified that various FBs are sometimes selected according to the situation, and minimal response are used especially when the emcees fail to get their turn, in order to ensure success of their next turn.

Keywords: IRF exchange structure Topic-Shift Paraphrasing Minimal Response Agenda